

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 伏木田 稚子

本論文は、学部ゼミナールにおける汎用的技能習得の実態を明らかにし、今後の方向性について考察した研究である。本稿における「ゼミナール」は講義と並ぶ授業形態のひとつであり、教員と学生によって構成される共同体としての意味も持つ。汎用的技能は「基礎的で転用可能な技能」という語と同義で用いられ、対人関係、問題解決、母語によるコミュニケーション、市民生活など、あらゆる場面で共通して求められる能力全般を指している。

第1章では、「ゼミナールは大学教育においてどのような点で重要なのか」という問いに答える形で、社会的な背景を論じている。比較対象としてアクティブラーニングと総称される授業スタイルに注目が集まっていることを取り上げた上で、ゼミナールは、「少人数での対話を通じた共同体的な学習環境」として揺らがない価値を有していることを主張している。

第2章では、「なぜ俯瞰的なゼミナール研究を行う必要があるのか」という問いについて、理論的な背景をまとめている。ゼミナールに関する先行研究のレビューによって、多様性や密室性を理由として包括的な視点を有した実証研究が不足していることが明らかになった。

第3章では、学生によるゼミナールでの学習経験の評価という視点から、ゼミナールにおける学習者要因、学習環境の客観的側面、学習環境の主観的側面、学習成果の関係を質問紙調査によって分析し、教員による指導が行われていると感じているほど対人関係力や問題解決力の成長実感・充実度が高いことや、共同体の結束性や互惠性に対する意識が強いほど汎用的技能の成長実感・充実度が高いことなどが明らかになっている。

第4章では教員によるゼミナールの授業過程の評価という視点から、学習意欲の喚起を介して汎用的技能の成長実感を高めるゼミナールの授業構成について、質問紙調査を行っている。分析の結果、専門分野の学習を深め個人の意欲を引き出して探究心を醸成することを目標としていることや、発表や教員－学生間での議論を設け、課題遂行の支援に注力することなどの工夫がなされていることが明らかになっている。

第5章では、学生によるゼミナールでの学習経験の評価研究および、教員に

よるゼミナールの授業過程の評価研究を受けて、転用可能な技能の成長を支えるゼミナールのあり方について考察している。教員－学生間の密なかかわり、主体性を引き出す学習活動、多様性を認めるまなざしが重要な役割を果たしていることがまとめとして示されている。

審査会においては、用語の定義や論理展開に加え、今後の課題に関する質疑応答が行われた。用語の定義については、コンピテンス・スキル・技能・知識の関係やディープラーニングとアクティブラーニングの関係を中心に確認が行われた。論理展開については、専門教育を出自とするゼミナールから汎用的技能に結びつけるロジックや、海外の状況との比較の必要性などについて指摘がなされた。今後の課題として、静的な実態を明らかにする研究としての価値を認めた上で、より動的なコミュニケーション過程の分析を行うことや教育実践レベルにおいてより踏み込んだ提言が望まれるという助言もあった。

論文に改善の余地があることが指摘される一方で、本論文が先行研究においてほとんど取り扱われてこなかったゼミナールに関する実証研究として新規性の高い論文であることや、博士論文として構造がしっかりしていることについては高い評価が与えられており、総合的に見て合格水準に十分達していると審査員全員が合意した。

よって本論文は博士（学際情報学）の学位請求論文として合格と認められる。